

---

# 中ボス様の業務日誌

鈴一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中ボス様の業務日誌

### 【Nコード】

N5056V

### 【作者名】

鈴一

### 【あらすじ】

高卒就職4年目。

嫌な上司とオーバーワークでそろそろ胃がやばい俺、ふじむらいちひこ藤村市彦は下  
っ端会社員。

人生のクーリング・オフを本気で考えるこの頃だったが、なんとこ  
の度昇進しました。

場所は異世界、魔族領土。

役職は中間管理職。上司は魔王様。

ぞくに言う中ボスである。

・突発的な思いつきのため、不定期更新です。

# 1：すなわち、土下座

心地よいまどろみ。

通勤中の電車内か、はたまた仕事中の居眠りのような。  
起きなければいけないのだが抗えない眠気。そんな感じだ。

（ああ…今日は…今日だけは仕事をさぼってしまおうか…）

思考も定まってる俺はぼんやりとそう思った。

社会人にあるまじきことだが、たまには大目に見て欲しい。  
会社に入って約4年。

嫌味な上司の理不尽な命令を聞きながら朝から晩まで働きっぱなし。  
有休なんてただの夢だね、と悟りきった今日このごろ。

つらい下っ端生活を送り続け、疲労も繊細な俺の胃もピークだ。  
休みたい。そろそろ休みたい。

翌日の上司の小言やまわりの目を思うと若干くじけるが。

（…おやすみなさい…）

幸せいっぱい不安半分で呟く俺の意識はあっさりと、落ちていき―

『~~~~~』

落ちて…

『~~~~~』

…俺の眠りを妨げるのは誰だ！！！！

急激に浮上する意識。

それが誰かの声によってもたらされた目覚めだと理解した瞬間、俺は行動を起こしていた。

「申し訳ありませんでした！！」

寝そべっていた身体を起こし正座。

そのまま手の平を床につけると頭をこれでもかというほど下げる。  
すなわち土下座。

「すみませんすみません！ちょっとうとうととしてしまっただけなんです！故意に寝ようとかなんて全然思ってません！さっきまで真面目に仕事してたんです！」

嘘八百並べながら黒く冷たい大理石の床に、頭をすりつけるように謝り続ける。

プライドなんかとつくの昔に丸めてポイだ。  
今リストラされたら -

(…………ん?)

大理石の、床？

てつきり職場のデスクでいつのまにか居眠りしてたのだと思ったんだが…。

うちの職場は普通の絨毯がひいてあり、間違ってもこんな高級感をかもしだしてる大理石なんかじゃあない。

ではここはどこだ？

ゆるゆるとやってくる不安。

床と挨拶したままの顔をそろり、とあげる。

そこには一人の人物がいた。

最初に見えたのは焦げ茶色の、何かの革らしい丈夫そうなブーツ。スラックスのようなズボンのうえに膝ほどまであるゆるい服…まるでローブのようなものを着ている。さらに顔をうえにあげ 絶句した。

男は見た感じ、歳は俺と同じくらいに思えた。

ミルクティーみたいな色の髪に、緑の目。

全体的に優しい印象を与える顔のパーツだが、なぜか俺と同じように驚きと困惑の表情でこちらを見ている。

硬直した彼の手から魔法使いのような長い棒が、音を立てて床に転がった。

（が、外人さん？）

それも、コスプレ仕様の。

## 2：どうみても、異世界

驚愕とか不安をなんとか押し殺した俺は、外人さんの顔から視線をはずす。

目を向けたのは彼の手から転げ落ちた杖だ。

そう、杖。

長さは1メートルよりちょっと長いくらい。

なんの素材かはよくわからないが白く細い筒状で、先端のほうには数センチあるダイヤ型の透明な水晶がついていた。

うむ。シンプルだが品の良い一品。

…って評価してる場合じゃない。

とりあえず状況はわからないが第一印象は大事だ。  
いまだ固まっているらしい外人さんに渡そうと、その杖に手をのばし

「~~~~~!!」

我に返った彼にもの凄い勢いでかつさられた。

その勢いに驚いたのは俺だ。

表面上は目を瞬かせてるいる程度だが本当は心臓バクバクだぞ！  
チキンハートなめんな！

そんな俺の抗議の電波が伝わったのか、さらに彼は一步俺から後ずさると少々強い口調でなにやら話しかけてくる。



なにやら、だ。

そう、さっきもそうだったのだが……言葉がわからん。  
英語ではない。聞いたこともない。

だが彼が怒って……いや、警戒してるのはよくわかる。

もしかして杖を取られると思った？

……わかったからと言って、言葉わからんプラス自身も困惑気味の俺には弁明すらないのだが。

伸ばしたままになっている手をなんとなく開いて閉じて。ぐっぱー  
ぐっぱー。

……人間、どうすればいいかわからなくなったときは硬直するか  
意味のわからない動作をするかしかないんだな……。

ちよつと遠い目をして現実から目をそらした俺をどう思ったのだろ  
うか。

少しばかり警戒をおさめたらしい彼は、そろりと俺の方へ近づいて  
くる。

もしかして可哀そうな人だとか思われたんだろうか……第一印象最悪  
じゃねーか。

近づいてくる彼をまた警戒させないように、ゆっくりと立ち上がった。

数歩ほどの距離を取った外人さんを改めて観察してみる。身長は俺  
と同じくらいだ。そしてやっぱりコスプレだ。

ついでとばかりに周りを見回す。

室内で、広さは……高校の教室4個分くらいか？

床は大理石の黒一色。大きな窓には厚手の赤いカーテン。微かに零  
れた日差しから、いまが日中だとわかる。

扉は俺の背後に一つ。黒い木でできた大きな目のものだ。

部屋の柱や壁にはところどころ精緻な彫り物がしてあり、調度品はないがどこか洋風の屋敷や城みたいなイメージだ。

キヨロキヨロまわりを観察している俺を、相手も見ていたんだろう。

「……？」

再度言葉をかけられる。

なにかこれは問いかけているらしいが。やっぱりわからん。

わからないことを伝えるために首を振ったり傾げたりしてみる。それは理解してくれたらしい。

「ここはどこですか？」

丁寧に、俺が問いかける。

今度は相手が首を傾げた。やっぱり日本語は通じないらしい。

(…まいったなこりゃ…。)

その後。

ちよいちよい、と外人さんに手招きされた俺は部屋を出て彼について行く。

さつき、屋敷だとか城みたいだなと思ったが…本当にそうじゃない

か？

まるで海外の高級ホテルみたいな広い廊下。一体いくつあるんだよ、  
って言いたくなるほど多い部屋。

壺とかそういうものはあまりないし華美ではなかったが、今歩いて  
いる廊下でさえいかにも『歴史とか価値がすごいんです』って訴え  
てくるオーラがすごい。

…なあ、ほんとどこだよここ！

そんなことを思いつつも今の俺には前を歩きながらときどき振り返  
る彼についていくしかできず。

別に逃げやしないよと思いつながら階段を一つ上ると、ちらほらと人  
影が見えてくる。さっきの階では人はみかけなかったな。

第一印象、第一印象。

心の中で復唱しつつ、傍を通り過ぎたお姉さんに会釈。

（うおお…今の人、美人だなあ…。ぼんきゅっぼん！って感じの…。  
背中から生えたコウモリ羽根なんかやけに似合ってチャームング！）

友人に情事発動ムツツリ助平という不名誉な称号をつけられている  
俺である。

内心うはうはしながらもそんなこと顔にもださない。そう、いくら  
羽根生えた美人が傍を通ろうとも……………え？

（は、羽根…？）

やっぱりコスプレ会場か！？

そついや通り過ぎる人は微妙にファンタジーな格好をしてる人だっ  
たり、耳がとがってたり、金髪やら赤髪は外人さんだと思っていた  
が…青髪ともなると……。

(…うん。コスプレ。コスプレだとも！)

きつとコスプレ大好きな外人さんたちの集まりにきてしまったんだろ。いつどうやってきたかとは置いて！

(ははは、そうだよな。コスプレに決まってるって…。)

……俺の頭上を何かが通り過ぎた。

見間違えでなければ妖精みたいな羽根の生えた猫だった。

…いや、見間違えた。きつと。

……こんどは俺の脚元をスライムっぽいなにかが通り過ぎたとしても。それはきつと気のせい。

「……………うん…………見間違えじゃねえよ……。」

思わず立ち止り。咳く。

俺より少し前を歩いていた外人さんが振り向いて何か言ってくるが、ただただ茫然と立ち尽くすしかない。

外人さん…いや、この場合は俺の方が『外人』なんだろうな。

故郷の父さん、母さん。嫌味な上司に、アホな友人たちよ。

どうやら俺は、異世界に来てしまったらしいです。

### 3：カリスマさん、ご対面

なんとういうかもう、衝撃が大きすぎて放心するしかない…。

俺の人生は一体どこへ向かってるんだ？

たしかに仕事から逃げ出したいと思ったこともあるが断じて異世界ではない！

そしてくやしいことにこんなイベントの定番セリフが言えていないだど！まあはじめに見えたのは大理石だからこの場合「知らない大理石だ…」だけでも。

そんな余裕なかったけどな。

さて、若干放心してる俺を押したりひいたりしながら頑張ってたてきてくれた外人さん。ごめん、ありがとう。

だいぶ歩いたのでもとの場所からは結構離れているはずだ。

立ち止まった扉はまわりのものより少し大きくてさらに立派にみえた。

黒い光沢のある木製の扉には葡萄のようなツタのある植物と、数羽の小鳥が彫られている。

葉脈や羽の一枚一枚が細かく彫られた気の遠くなる様な繊細なそれをじっくり観察する時間はなく、軽いノックのあと室内にいる誰かと言言二言会話した外人さんはゆっくりと扉をあけた。

部屋に入った外人さんが優雅に一礼。

背後からその様子を見て、この部屋の主は彼の上司もしくは彼より身分が上の者なのだろうと考える。

予想外だったらしい俺の出現のため、報告にきたのだろうか。

…だとすると心証を良くしたほうがいいよな！どういう対応されるかわからんし。

ないとは思いたい、不審者あつかいでバツサリなんてやられたら笑えん。

俺は『ここ』がどういう場所なのかまったくわかってないのだから。上司さん（仮）に俺を見せるため、前から身体をずらす外人さん。言葉の意味は伝わらないだろうが、挨拶のひとつでもしようと口を開いた俺は、そのまま固まった。

口をあぐりと開けながら、視界に入った人物を凝視する。外人さんのときとは比べ物にならない衝撃だ。

ここは異世界。ファンタジー。どんな姿のひとがきても大丈夫なように心構えはしていたのだが…そんなものは吹っ飛んだ。

目の前にいたのはスライムでも半裸のおねえちゃんでもない。だが予想外だった。いろんな意味で。

姿は人型だ。

いわゆる人間と違うところといえば、こめかみのあたり…豪奢に波打つ、深い色の赤髪から覗く黒く拭れた左右の角。

ひたりと俺を見つめる黄金の目は、瞳孔が猫のように縦に細い。見た目は30代半ばに見え、同時にものすごく美形でいらっしやるのだが…。

カリスマオーラがはんぱじゃない。

なにこれ！？なにこのひと！？

ゆったりと構えた雰囲気とかガンガン魅了してくる微笑とか俺この人になら抱かれても…よくねーよ！それは嫌だが！！

「……？」

ハッ、カリスマさん（名称変更）がなにやら話しかけていらっしやる。  
す、すみません聞いてませんでした…。どっちにしろやっぱりわからん…。  
しょんぼりする俺を見て再度口を開くカリスマさん。

ん。なんかさっきの言語と違うな。別の言葉だろうか。

だが…。

「すみません、何を言ってるのかわかりません…。」

何も説明できない、聞けないことを再確認。申し訳なさで絶望が胸をしめる。

ああ…まじでどうなるんだ。

ほら、カリスマさんなんか少しばかり眉を寄せた表情になって…。

「君は和国出身か？」

女性だったら腰がくだけそうなテノールボイスで聞いてきた。

…。

…。

…えっ？

「日本語わかるんですか!？」

「二ホン?…和国の言葉ではないのか？」

「俺のいた国が和と呼ばれることもありますけど……。あ、ジャパンとかジャポンとも言われます!」

「それも聞いたことがないようだ。」

言葉が通じた嬉しさでどもる俺とは対照的にゆるやかな口調を崩さない彼は、真っ直ぐこちらを見据えたまま問いかける。

「率直に聞こう。『ここ』は君がいた場所と同じだとおもつか？」

「…違うとおもいます。俺のいた場所：世界は、貴方達みたいな種族はいない。」

「そうか…。」

俺の答えはとうにわかってたんだろう。

一つ頷いた彼はおもむろに椅子から立ち上がる。

その動作さえ隙がなく優雅で「あんたどこの貴族だよ」って内心つつこんだけど、本当に貴族かもしれない。

…っていうか何故俺の目の前に立ち、あまつさえ人差し指を俺のデコに突きつけてるんですか？

も、もしかして始末ですか！？殺されちゃうんですか！？

逃げたいのに恐怖で身体が動かねええ！

「そう怯えるな。少し説明しやすくするだけで、君を害そうとは思わない。」

俺の心を読んだかのように苦笑される。

なんだ…びびらせないでくれ。俺は庶民なうえにチキンだ。

「だが少しばかり痛む。」

パードウン！？



「ちょ、ちょっと待ってくれ！一体何を……ッ」

悲鳴に近い俺の抗議は、頭に走った冷たく突き刺さるような痛みに途切れる。

少しばかりとかじゃないその痛みは早々と意識を手放す俺は、視界が黒く塗り潰される前に自ら目を閉じた。

#### 4：もしかして、魔王陛下（前書き）

お気に入り等ありがとうございます！

説明の多い回になります。行き当たりばったりで書いているため先が不安でなりません。  
中ボス編が遠い…。

#### 4：もしかして、魔王陛下

キーン、とカキ氷を一気食いしたような冷たい痛みを頭に感じて目を覚ました。

徐々におさまっていく痛みには耐え瞼を開けると、目じりに溜まっていた涙がぼろりと落ちる。

スーツの袖でそれを乱暴に拭って、何度か瞬いた。

ぼんやりとした視界のなかに映るのはアパートの安っぽい天井ではなく、ベージュのようなやわらかい色合いをしたものだ。

「知らない天……」

「お目覚めですか？」

「俺はテンプレセリフすらともに言わせてもらえんのかッ」

「す、すみません！」

思わずツツコミとともに上半身を起こすが、貧血に似た軽いめまいを感じて額を押さえた。

徹夜して出勤した日に似てる。2徹して部活もやっていた高校時代はもはや遠い。

「まだ痛みますか？」

「痛むというかくらくらする……お？」

気遣うような声に顔を向けると、そこにいたのはミルクティー色の髪をした男性。

「外人さんじゃないか。」

「外人さん？」

「あ、こ、こっちの話……………てか、言葉……？」

いつのまに流暢な日本語を？

そう言おうとして、気づく。

流暢に話してるのは俺だ。

先ほどまで微塵も理解できなかった言語を母国語のように容易に話していた。

違和感がないでもないが、不思議な出来事（異世界にいる時点で摩訶不思議だ）に若干興奮気味に口を開く。

「うわ…なにこれすごい！」

「どうやら問題はないようですね。」

俺に異常がないことを確認すると、心配していたのか寄せていた眉が下がる。普通にいい人だ。  
そして彼は座っていた椅子から立ち上がると、緩やかにお辞儀をした。

「私はリッケン・ハーヴィトン。この城で召喚術師をしております。  
リッケンとお呼び下さい。」

慌てて俺も寝かされていたソファから立ち上がり、スーツの乱れを軽く整えると挨拶を返す。

「あ、ご丁寧にも。俺は、いや私は藤村市彦です。…こっち風に言っとイチヒコ・フジムラかな。」

「フジムラ様、ですね。どうぞ普段通りにお話ください。」

「えっいやいや様とかいりませんし、そんな丁寧に対応していただくなくても全然…」

「ではイチヒコ様、と」

様はいらんっちゅーに。

普段通りに話してくださいと言われたので、お言葉に甘えることにする。

ちなみにハーヴィトンさん…いや、リッケンに敬語はやめてくれと言ったのだが「これが普段通りですので」と返されてしまった。

あらためて回りを見れば、場所はさっきの部屋のままだ。

執務室なのだろうか、大きめの机が一つ。小さめのが二つ。

俺がいるのは机から少し離れて邪魔にならない位置で、休憩スペース、来客用も兼ねていそうなソファとミニテーブルがあった。

部屋の両壁の本棚にぎっしりと並んだ書物の世表紙には難しそうなタイトルが並んでいる。

もちろん日本語ではない。どうやら文字も読めるようだ。なんて便利な。

部屋から出ていったのか、カリスマさんは見えなかった。

対面するようにソファにすわると、用意されていたお茶（紅茶に非常によく似ている）を一口含んで口を湿らせる。

「いろいろ聞きたいことが多いが…言葉が通じるのはさっきの…魔法？のおかげなのか？」

「はい、そうですね。正確に言えば魔法ではなく魔術ですが。」

違いがよくわからん。

「便利なものだな。」

「そうですね。ですが先ほどの術は使える者も使われる者も限られてくるのです。魔力を介して直接脳に働きかけるので、術を施すにも高い技術が必要ですし対象も高い耐性や魔力が必要になります。」

なるほど、カリスマさんはかなりの腕っつてことか。しかし…

「…俺魔力なんかないけど…」

「いいえ、イチヒコ様は高い魔力をお持ちです。そうでなければ先程の術で…あ、いえ、なんでもありません。」

「おいしいいいい！どうして口ごもる！目をそらす！

失敗してたら何が起こつてたんだ！

じつとりとした俺の視線をスルーして、説明を続けるリツケン。

「それに、召喚されたのが魔力をもつ証拠です。」

「どうということ？」

「……………まずは私たちのことからご説明しなければなりませんね。私たちは魔を司る種族。つまり魔族というのですが…」

「……………うん……………やっぱり魔族だったか。」

「え？」

「あ、いやなんでもない。続けてくれ。」

スライムとかいる時点で人間サイドではないな、とか思ってたわ。

「私たちはもともとこの世界…ユーリエラにいる者ではありません。数千年前、故郷となる世界アデイルで他の種族との大規模な世界戦争があり、その結果こちらに移住してきたのです。」

「戦争に負けたのか？」

「いいえ、戦争には勝ちました。ですが長い戦いの結果世界にあった元素魔力…自分の身体で作る魔力と違い自然界にあるものをいうのですが…それが消費され、元素魔力を生活にも使う我々にとって普段の暮らしすらままならない状況になってしまったのです。元素魔力は日々自然に溢れるものですが、戦争による自然界の破壊のせ

いか回復力も著しく低下していました。」

「このままそこにいても、いや自分たちがいるから元素魔力は消費するだけで、世界が元通りにならない。だからいつそ元素魔力の豊富な別の世界へ……ってことか。」

「その通りです。新天地となるこのユーリエラを見つけた私達は、移住する者とアデイルに残る者に別れることになりました。いろいろと理由はあるのですが、先住民との無駄な争いをさけるためと、世界の境界移動の負荷に耐えられるのが一定以上の魔力をもった者だけだった、というのが大きなところですね。」

当時の戦争で魔力の高い人たちが亡くなっていたため、渡ったのは全体からすると少数だったそうなの。全体の人口も減っていたんで残り組の人口も、ほそぼそと暮らせば元素回復にギリギリ支障がない程度だったらしい。

世界を超えるには魔力がいる。だから俺が召喚された。俺には魔力があるってことか。

そういってなぜかちょっと困ったような苦笑になるリッケン。

「それなのですが……その、もともと魔力を高いひとを呼ぶつもりだったのです。それで間違っても呼ばれたイチヒコ様はそのひとと同等の魔力があると思われます。」

「呼ぶって……もしかしてアデイルから？」

「はい。」

「そりやまたどうして」

「戦争のために。」

「戦争！？移住したこっちでも戦争をしているのか！？」

戻ってもツライ生活だし、異世界にいてもいいなー、とかチラチラ思ってた俺が馬鹿だった！

戦争とか死亡フラグでしかない。今すぐ戻してもらおうように頼まねば！

「あ、勘違いしないで下さいね？私たちが侵略しているのではなくあくまで防衛です。」

慌てたように弁解するリツケンに、とりあえず俺も落ちつくことにする。見た目だけは。

「もともとユーリエラにいた人と友好関係を築けなかったとか？」「いいえ、なんとか衝突はありましたが昔は友好的でした。我々も無駄に脅かすことをしないように、移転先は先住民の文化の中心だった西大陸ではなくほとんど未開拓だった東大陸に居を構えましたし、魔力というものの知識と技術を授けたのは私たちです。」

魔力がある、使えるから魔族ってわけじゃあないのか……あ、それだと俺も魔族だわな。

「ですが、百年ほど前から人間の間で魔族を悪魔とし、邪悪なものとする宗教ができたようで……それでも嫌悪される程度だったのですがここ数十年軍を率いて国境を勝手に越えるわ、武力をもたない町や村を襲うわで……本当に困っているのです。」

「宗教か……俺の世界でも昔あったらしいよ。」

「どこの世界も同じなんですネ……。ああ、人間の国全部がこちらを敵としているわけではありませんよ。」

あくまでその宗教を掲げる国々、個人のほかは、敵対はしなくとも皆傍観姿勢らしい。

友好的な国はごく一部。

たしかにへたに仲良くして回りの国に叩かれたくないよな。



人間たちの国同士でも戦争しているところはあるんだそうだし…。

「最近さらに激しくなった彼らの行動に、国境や街の警備や、軍を拡大しようとアデイルから人員を借りるつもりだったのですが…。」

「…なぜか俺がきてしまった…と…。」

「はい…………… 本当に申し訳ありません。呼びかけに『応え』が返ってきたときなにか違和感を感じたのですが。」

「いや、なんか反射的に応えたっぽい俺も悪かったよ。うん。それで、俺は帰れるのか、帰れないのか？」

「…可能性は極めて薄いです。」

リッケンが申し訳なさそうに目をふせた。

まあ最初にそれを言わなかったことでだいたい察しはついていたけど…。

「いや、薄いどころかないだろうな。」

「うおお！？」

唐突に横から聞こえた声に比喻ではなくソファから飛び上がる。

激しく脈打つ胸を片手で押さえつつ視線を向ければ、そこには波打つ赤毛の……………カリスマさんだ。

あんたいつ、どうやって入ってきた！？

ドアの開く音しなかったぞ！！

ほら、リッケンも驚いたみたいに立ちあがって……………丁寧に一礼。

「陛下。」

そうカリスマさんと呼ぶ。

……陛下？

「……あの…へ、陛下って…王様…だよな…」

ギギギギ、と油を差していないロボットのようなきこちない動きで  
リッケンの方を見る。

「はい、私たちがお仕えする国王陛下です。」

リッケンたちの王。

つまり魔族の王………ってことはだ。

「もしかして………魔王陛下で…アラセラレマスか…？」

「如何にも私は、魔国ラグノヴァが王…、魔王シエルカ・ウイグ・  
ファフノイアだ。」

ひきつった笑みを浮かべる俺をみて、カリスマさん、いや、魔王様  
は笑顔でいいやがっ………おっしゃったのです。

## 5：ぞくに言う、中ボス（前書き）

お気に入り等ありがとうございます！  
不定期更新で申し訳ありません。

話数表記間違えていました5です

## 5：そくに言う、中ボス

魔王。

RPGではいわずと知れたラスボス様。

勇者の敵であり、世界制服だったりとか闇の化身だったりとかときどき暗い過去をもっていたりとかするアレである。

どちらにせよ『主人公側』からすれば敵であることが多い。

…俺が主人公側なのかどうかは置いてッ。

いきなりのラスボス名乗り上げで終了のお知らせ気分な俺は、なんとか自己紹介を終えるとソファァーに座れとすすめられた。

俺は座った。正座で。

座らずに魔王様の横に控えたリッケンからかなり不思議そうな目で見られたが、つつこまればしなかった。

リッケンが腕をひとふりすると、魔王様の前に俺と同じようなティ―セットが現れる。

魔法って便利すぎる、こういう仕組みだよ、とか普通の状態なら思っているところだが今の俺は獅子に…いや魔王に睨まれた村民A。

さきほどの「戻る確率低いところかない」的な不穏発言が気になっ  
てはいるが、問えるわけがなかったただお言葉を待つのみである。

俺がぐるぐるチキン思考している間に何度か言葉を交わす魔王様と  
リッケン。

「…もしや、『繋がり』が完全に…？」

「ああ、あとかたもなく消滅していた。彼 イチヒコの魔力のせい

なのか、事故ゆえの繋がりの希薄性が…まあ、どちらもだろう。」

だから俺の魔力ってなに。繋がり？

疑問を浮かべる俺に気づいた魔王様はこっちを見て説明してくれる。

「過去に我らが一族がこの世界にやってきた移転とは違い、普通、通常の召喚術で呼び出された対象は元の場所に帰れる。いや還される。召喚術者の魔力が切れることがあれば強制的に。それは『繋がり』…糸、とも呼ばれるもので対象と、元の世界が繋がっているからだ。」

「命綱…みたいなものですか？」

「そのとおりだな。対象を一生呼び出した世界に居させるとするなら、その繋がりを切るしかない。元の世界との繋がりがなくなれば強制的に戻されることはない。そして呼ばれた世界で過ごししていくうちにまた新に世界との繋がりを得る。」

「そうすると、対象の元いた世界に戻る方法は限られてきます。対象を送りたい世界の情報を詳しく知っている術者がいる場合。アデイルはこれになりますのでここからアデイルには送ることは可能です。もう一つは元いた世界から呼んでもらう…つまり召喚してもらうことですね。これは個人的に対象を指定しなければなりません。」

「さっき…繋がりが切れたとかつて…。」

おそろおそろ、これはリッケンに訪ねたのだが答えたのは魔王様だった。

「世界のすれ違いのような、一瞬のリンクによる召喚、ただでさえ薄かった繋がりがだが召喚時に対象の…つまり君の魔力がそれがかき消してしまった。」

「えっ！？お、俺そんなことしてな…ッていうかできないですよ！

？」

対象の魔力の放出は召喚時、無意識に起こる現象らしい。「普通はそれで消えたりはしないほど繋がりは強固なのだが」と付け加えられる。

「……イチヒコ様の世界に、イチヒコ様を呼び戻せるような術者はいますか？術はありますか？」

「ない……少なくとも俺は知らない。術や魔力なんて俺の世界ではゲームや作り話でしか出てこないものなんだ。いるのはただの人間だけだ。」

もしかしたら世の中の超能力者やマジシャンのなかにはそういう力をもってた人もいるのか？

いたとしても召喚なんてたいそれたこと出切るとは思えないし、第一俺の存在なんて知るわけないだろうな。

ああ、俺やつぱ帰れないのか。

ストーン、と納得する。

もつと衝撃があるとおもったけど、心にぽっかり穴があいて、そこが少し寂しいだけだ。

うん、少し寂しい。

いい世界かっていわれたら完全にイエスとは答えられないが両親も友人もいる俺の故郷だ。

読みかけの漫画だって、やりかけのゲームだって、ネットの友達だって気になる。

それだけといってしまうえばそれだけだけど、切り捨ててしまうのも躊躇われるもの。

「本当に…申し訳ありません。私が…」  
「事故なんだろう？さっきもいったけど、リッケンが謝らなくてもいいさ。」

なるべく明るく答えてやる。実際ちよつとだけ落ち込んでるだけで、怒ったりはしてないんだ。

うん。いい方向に考えよう。

人生を新しくやりなおせるチャンスだぞ？

そうやって思い、それを告げようとする俺の言葉よりはやく。

魔王様が言った。

「いや、事故でもこちらの責任だ。君を巻き込み、元にもどすことができない。君の一生を我々は奪ってしまったも同然だ。」

あらためて、俺のほうを向く。

「謝らせてくれ。…すまなかった。」

黄金の眼に真摯な色を浮かべ、ゆっくりと頭を下げ彼はあやまった。一国の王が。それも魔王とかいうラスボスが、一般市民どころか異世界の珍獣である俺に。

階級なんて普段の生活ではまったく関係なさすぎる日本人ではあまり実感はないがそれはすごいことなんだろう。

リッケンなんて目を見張ったあと慌ててもう一度自分も深く頭を下げてるし。

俺は、はっと我に返ると「頭を上げてください頼むから！」と悲鳴まじりに言った。

反応が遅れるほどに、俺の心は最終的に一つの思いがしめていたのだ。

つまり、

な、なんていい上司なんだ……！！！！

と。

元の世界の俺の上司と比べたら……いや比べるのも失礼だ！

部下の失敗は上司の責任なんて言葉よく聞くけど実際にこんな潔く頭を下げ、心から謝れる人がどれだけいるだろうか。

魔王でも、なんでも、悪いと思ったときには謝れる。

それは外交問題のないこの場だからできることも知れないが……。俺は思ったのだ。こういう上司の下で働きたい、と。

俺の人生で今までこんなにも働きたいとおもったことがあっただろうか。いやない！

だから俺は頭を上げた魔王様が言った内容に驚くと同時に歓喜した。

「人間の国に移りたければ一番安全な国へ。このまま我らの国へ留まるのであれば衣食住はもちろんでできることは最大限にしよう。その間にも、君を元の世界に帰す方法を調べることも忘れない。そして……」

これは強制ではない。

だから断ってくれてかまわない、と彼は前置きした。

「私は……君に、私の部下として働いてもらいたい。」



その言葉なぜカリッケンが俺の10倍驚いてた。

「へ、陛下ああ！？悪い冗談はやめてください！」

「私は本気だ。」

魔王様は心外だな、というように器用に片眉をあげてみせる。

「ならばなお悪いです！彼は一般人で、しかも異世界の人ですよ！貴方の部下ということは軍に入ることですか！？それを…」

「俺にできること、ありますか？」

「って、イチヒコ様…受ける気なのですかッ」

ぐわつと効果音が聞こえそうな勢いで振り向かれ、俺は若干上体をそらした。

…絶対、リッケンは怒ると怖いタイプだ。

「軍に下るということは戦争に参加するということです、敵は『人間』ですよ？もしかしたら直接手にかけることもあるかもしれません。」

うん、それはわかってる。

きつと後悔なんて無茶苦茶するし、思ったこと全部現実に行けるわけないって知ってる。血なんて見た日には卒倒するかもしれないし。けど『人間』相手ってことは、あまりたいしたことじゃない。

人間とか魔族とかで区切るなら俺は異世界人だ。たしかに異世界の人間ではあるけど…。

対峙したとき、仲間意識は浮かぶだろうか？

少なくとも今の俺は魔族だからって嫌うことも人間だからって庇う意識もない。

それに、

「ぽろつと落つこちた世界で、俺を必要としてくれる人がいるっていうのがすごい嬉しい。元の世界では期待されることなんてほとんどなかったし。あと、俺なんか見なかったふりで捨て置けばよかったのに、わざわざ世話してくれる貴方たちの力になりたい。」

実際、殺してしまえばよかったのだ。

それが一番楽な選択肢だったろうに。  
でも彼らはそれをしなかった。

「俺に… なにかできますか。」

もう一度、俺が問いかける。

真っ直ぐ目を逸らさずにいると、ふと魔王様の目が微かな驚きとともに笑った気がした。

「できる。高位魔族と比べても遜色ない、高い魔力がある。頭の回転も悪くない。礼儀もわきまえている。意志も、優しさもある。何より私が期待するのは君は異世界の、それも人間だ。違う観点で物が見れるだろう。」

魔王様はこんどこそ笑って言った。

「君はよい部下になるだろう。これはまるきり勘だがな。」  
「精一杯努力します！」

勢いよく答えた俺をみて、リッケンはため息をついた。  
あきらめのため息だった。

「はあ…本気なんですね…。…まあ、人間の国へ行つてその魔力の高さを利用されないかとか、変な実験されないかとは危惧していたので我が国に残っていたただくのはありがたいのですが…」

うお、そうか…そういうこともあるよな。

もしかしたら実験動物エンドだったかもしれないんだ。

「もともと人員不足で人を呼ぶつもりだったしな。その役職につかせればいい。もちろんはじめのうちはこの城でいろいろと学ぶように。」

「…では、武官…第六軍上級将官です。直属の部下をまとめる将軍となります。」

「はあ！？ちよつ…ちよつとまってくれ！上級！？将軍！？下っ端じゃないのか！？」

彼らの爆弾発言に俺は驚きで前のめりになり、ずっと正座スタイルだったために足がしびれてあやうくソファーから転げ落ちるところだった。

「魔力だけなら十分つとまるだろうし、ちゃんと補佐もつけるが。」

「そういうのって普通貴族とか軍人学校とか出身じゃないかぎり、兵卒からの叩き上げのイメージなんですが！？」

「もともと上級将官を呼ぶつもりだったのだ、代わりに出てきた君がなくても文句あるまい。」

いやあるでしょ！？ぜったいブーイングでしょ！？

無茶ぶりすぎてなんかほんとに悪の魔王に見えてきたんですけど！

「君には感覚的にわからんだろうが、魔力の高さというのはそれだ

けで高い役職につける理由になる。あとは人格だが、先ほどもいったようにこれも問題はない。たしかに上級将官は稀だが…人員不足から、軍人のなかには君のように能力や適性があるといきなり高い官位になりそこから勉強していくという場合もあるので、そう気にすることはない。この世界の知識さえ学べば変わらんよ。それに後で説明はするが第六軍は少し特殊だからな。…まあ、とりあえずやってみたまえ。」

どうやら決定な流れだ。

チラリとリッケンを見れば「諦めてください」という同情に満ちた目でみられた。

「…はあ…わかりました…。ええと、俺の部下とか上司って誰になるんですか？」

「直属はまだ編制中です。指揮権としては直属以外にも、将官…上級将官の下位の位です…将官以下への命令権をもっています。軍部としては上級将官より上はありませんのでイチヒコ様の上官にあたるのは陛下になります。実際軍の総括をなされているのは陛下です。」  
「それってつまり中間管理職…。」  
「まあ、そうですね。」

魔族の中間管理職って……………オイ。

魔族の中間管理職、と聞いて俺の中で一つの単語が浮かび上がる。それはある意味倒されること前提のように聞こえるものだ。

…いや、そんなフラグへし折ってやる。

俺はこの、事故でたまたま、不幸にも落っこちた世界で生きてやると決めたんだ。

故郷の両親、友人たちよ。  
聞いてくれ。

高卒就職4年目。

嫌な上司とオーバーワークでそろそろ胃がやばい俺、藤村市彦は下  
っ端会社員。

人生のクーリング・オフを本気で考えるこの頃だったが、なんとこ  
の度昇進しました。

場所は異世界、魔族領土。

役職は中間管理職。上司は魔王様。

ぞくに言う中ボスである。

## 5：そくに言う、中ボス（後書き）

これで1章は終わりです。

このあと閉話やら別視点を書く予定ですが、予定なのでいきなり2章がはじまるかもしれません。

## 5・5：中ボス業務日誌（1）

【ユハナの月12日】

やあ、諸君、みんなの中ボス市彦だよ！

：いやごめん、スルーしてほしい。この日誌をみた誰か。

と、いつても日本語で書いてるから読める人がぎられるだろうなあ。こちらでいう和国語が日本語にあたるらしいがどうもマイナー言語みたいだし。

あ、ユハナの月っていうのはあっちでいう5月にあたる。月は同じく12月。ひと月は31日で固定だそうだ。

時間経過やその数え方は地球と同じだ。これで一日が76時間あるとか1分が42秒とかだったらどうしようかとおもった。

さて、人生初（何度もあつてたまるか）の異世界トリップ、しかも魔族領土にこんにちはした俺ですが、超昇進であれよあれよと中ボス位置になったようだ。

事故で来た異世界の人間を即登用して、しかも上級だとか將軍だとかちよつと四天王てきな位置においちゃうのってどうかとおもう。

魔王様まじ魔王。器がでかいのかいい加減なのかわかりません。

あと中ボスとかすっごい倒されるフラグなんですけど。

ところで管理職だったら業務日誌書かなきゃな！とおもって書いてるけどこれただの日誌というか日記だよな。

まあいいや。記録になれば。

今日一日はほんといろいろあった。

電車で通勤中か会社にいたのか…記憶はないがスーツでいるあたり  
仕事でだったのだろう。

そこをリッケン・ハーヴィトンという爽やか青年の召喚術で呼びだ  
されてしまった俺。

ほんとリッケンはなんで馬鹿丁寧なうえに様付けて呼ぶんだろうか。  
罪悪感もあるんだろうが。

まじ尊敬みたいな目でみられても…。魔力が高いだけで尊敬に値す  
るらしいが…俺なにもしてないよ？

そう、どうやら俺にはアニメ小説好きなら誰もが夢見る魔力とやら  
があるらしい。

はつきりって全然自覚ないんだが…。

さっき部屋の灯りをつける、壁にあるただの模様のような装置…微  
量でも魔力を持つてる人が触ると反応して天上についた発光石が蛍  
光灯並みに光るという仕組み、を触ったら見事に灯りがついた。

ってことはやっぱり俺には魔力というものがあるらしい。

ちなみにこの灯り、魔族領土で一般的（魔族で魔力がない人はいな  
いそうな）。

人間の街の一般家庭でも三分の一はこれ。魔力をもっていない人も  
いるため、貧しい家はカンテラ、それなりの家はあらかじめ魔力を  
いれて光らせてある発光石買って、夜になったらとりつけるそうだ。  
いちいち買うのは痛い出費だろうな！。

人間でも微量でも魔力がある人がだいたい一つの国で30%ほど。  
強いものだともっとしぼられる。

まあ人間は人口が多いそうだから人数にしたらには多いのかな？

魔力うんぬんは置いてこう。明日から調べよう。

そうそう、調べるといえばこの世界のこと…勉強しなきゃなあ。



魔王様もしばらくこの城で学べたってたし。幸いあのヘッドブレイク（命名）のおかげで字も読める。まずは歴史かなあ…。歴史はおもしろそうだな。小説みたいに読めそう。

そっぴいや魔王様って何代目の魔王なんだろう。

あ、あと俺の所属の詳細も明日話してくれるそうだ。

たしか第六軍だったけ。

特殊っていつてたけど何かな……………。

っは、やべえ…。

大切なこと思ひ出した。

俺のメガネがない！

俺はいつもやや太い黒フレームのメガネをしている。

度は入ってない。視力は悪くはないからだ。

メガネをかけるのは俺の、この初対面でちょっとひかれることの多い目つきの悪さを和らげるためだ！第一印象大事だよ！

やや釣り目気味、つんつん撥ねた硬そうな短髪、チキンの緊張ゆえ力の入った眉間…。

友人の佐々木いわくメガネとった俺は完全にチヨイ悪社員だそうだなんだよチヨイ悪社員って。流行らせる気か。

たしか廊下で通り過ぎたスレンダーなエルフ耳お姉さんがメガネしてたんだよな…。だからメガネはあるはず。リッケンにきいてみるか…。

うん、今日は寝よう。

このベット俺の自宅のより質がいいし…。おやすみ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5056v/>

---

中ボス様の業務日誌

2011年10月14日21時53分発行